

本源的思考としての対称性による互酬概念の考察

——サードセクターの根幹をなす経済原理の探求——

伊藤 好一（北海学園大学大学院経済学研究科後期博士課程）

市場原理の専一化による諸問題が深刻化する昨今、それらに対する解決策を模索する議論として、「サードセクター」に注目が集まっている。特に欧州におけるサードセクター論は、「社会的経済(*économie sociale*)」の研究を基盤としており、非営利組織(NPO)研究を基盤としたアメリカのサードセクター論と比較すると、多元的経済を追求する議論の集約として意義を持つものである。欧州サードセクター論において追求される多元的経済とは、経済原理としての互酬(*reciprocity*)を基礎として再配分(*redistribution*)と(市場)交換(*exchange*)がハイブリット化された経済動向を指している。すなわち欧州サードセクター論では、サードセクターの根幹をなす経済原理として、互酬の重要性が提起されていることが確認できる。

しかし欧州サードセクター論において、互酬に関する詳細な言及がなされていないとは言えないのが現状である。本報告では、カール・ポランニー(*Karl Polanyi*)による互酬の議論を確認したうえで、人間の本源的思考に則した互酬の規定を行うことを課題とする。

欧州サードセクター論においても言及されているが、「実在(*empirical*)の経済」の見地から、経済原理の1つとしての互酬を提示したのはカール・ポランニーである。ポランニーは原始共同体の経済行動に目を向けたうえで、経済原理の3形態として「互酬」「再配分」「(市場)交換」を提起している。ポランニーが提起する「互酬」とは、対称的な配列の呼応する点の間における財、サービスの動きを指す。「再配分」とは、中央に向かい、そしてまたそこから出る占有の移動を指す。「(市場)交換」とは、市場システムのもとでの点の間に発生する可逆的な移動を指す。これらの原理が基礎となり、多様な組み合わせをみせながら、現代の経済状況に至るのである。欧州サードセクター論では、これらの原理を基盤として、現代における3極経済(市場経済、非市場経済、非貨幣経済)の説明がなされている。

ポランニーの経済原理に関する提起において注目すべきは、それぞれの関係性について言及されている点である。特に「互酬」においては、相対する点の間に対称性(*symmetry*)が確認されることで成り立つ経済原理であるとみなされている。すなわち互酬の本質は、対称性の認識に焦点を当てることで見出すことができる。贈与と返礼をもって互酬とする議論も見受けられるが、贈与と返礼は過程であり、必ずしも互酬の本質を表す対称性が認識されていることの証明にはならない。サードセクター論に求められるのは、人間の本源的思考から認識される対称性に基づいた互酬の視座である。多元的経済を追求し、人々の連帯に寄与するためには、互酬は不可欠な経済原理である。ポランニーの提起する互酬に関する議論は、その裏付けとして意義を持つのである。